●インクルージョン・ミーティングVol.2

今年は、「ソーシャル・インクルージョン」をテーマにしています。

ソーシャル・インクルージョンとは
社会全体の中に、自立生活上何らかの支援を必要としている人々を社会の構成員として包み込んでいこうという考え方です。

平成19年度 第2回社会福祉講演会

「ヘレン・ケラーさんとの出会い」②
～忘れてはならないこと～

講師◎広島国際大学　医療福祉学部教授
特定非営利活動法人
大阪障害者雇用支援ネットワーク代表理事
關　宏之

ヘレン・ケラーの思想は、「インテグレーション=社会統合」で、サリヴァン女史の影響を受けた、まさに「インクルージョン」そのものの考えで、障害がある人は向こうの人、といった考え方に対して真っ向から挑戦し、人種差別の撤廃や反戦思想に連なります。

さて、ヘレン・ケラー招聘の立役者で、日本ライトハウスの創立者、岩橋武夫ですが、彼は、19歳で失明し、勉学を積みながらエディンバラ大学で修士学位を取った英文学者で、関西学院大学の英文学の先生でした。昭和9年にアメリカ講演旅行の際に、ヘレン・ケラーに会ったことが来日のきっかけとなります。

そして、昭和12年4月15日から8月10日までのおよそ4カ月間、過密なスケジュールによってヘレン・ケラーの足跡は日本国内はおろか、朝鮮・満州にまで刻まれます。当時の新聞をみると、「灯火管制」「南京政府批判」「盧溝橋」「徴兵検査」の記事とともに、「奇跡の聖女」「三重苦の聖母」の動静が紹介されています。この来訪には、障害者のある人の教育環境の整備を訴えるとともに、戦争への警鐘を鳴らす意図があったようですが、戦火にかき消されてしまいます。

ヘレン・ケラーは、またもや岩橋武夫の求めに応じて昭和23年に第2回目の来日をします。戦争で疲弊した国民に多くの希望と勇気を与えてくれますが、とりわけ、広島や長崎で受けた歓待に、「悲惨な状況にありながらも、人々はなおも慈悲の心を私に注いでいただいた」と日本人の優しさに触れたことを強調しています。ただ、障害のある人の社会参加や婦人の社会的な地位の向上にも言及し、障害のある人の職業自立や翌年の「身体障害者福祉法」成立に尽力されました。

なお、岩橋武夫は、無理に無理を重ねた体は疲弊し、昭和29年に亡くなります。昭和30年には、岩橋武夫の遺影に花を捧げるために彼女は3度目の来日をし、そして、1968年6月1日、87歳の生涯を閉じました。

第2次世界大戦後の混乱期の日本では、新憲法やほかの主要な法律が整備され、国民生活もいくぶん明るさを取り戻しつつありました。しかし、戦争によって障害を負った80万人にものぼる人々を救済し社会参加を促す法律の制定はたいへん困難をきわめていました。そこでヘレン・ケラーを先頭に、障害がある人たち・国民・政府が一体となって作り上げたのが昭和24年に制定された「身体障害者福祉法」です。

障害がある人の〈生きにくさ〉を解消し、ひとりの人間として当たりまえの〈暮らし〉を国家の責務として保障するとした「身体障害者福祉法」が制定され、わが国も近代国家の仲間入りを果たし、国際社会の一員として認められるようになったのです。

ところで、こんな大事業をなしとげたヘレン・ケラー女史も岩橋武夫もよく似た性格だったといいます。障害があるというだけで社会の片隅でひっそりと人目をしのんで生活しなければならなかったあの暗い時代に、カーネギーの「責任を背負うことは半ば成功を意味する」という言葉や「花は咲き、花は枯れる。だが、枯れてもまた咲き出でる花のあることを忘れてはならない」という言葉を愛し、それを実践された根っからの〈楽天主義者・楽観主義者〉で、そのスケールの大きい〈あっけらかん〉には皆があきれ返ったそうです。

映画や演劇のラストシーンで、〈聞こえない・見えない・話せない〉少女が、サリヴァン先生の手をまさぐりながら指文字で「W・A・T・E・R」と綴り、たどたどしく「ウオーター」と発したあの瞬間に感動の涙を流された方も多いと思います。

〈聞こえない・見えない・話せない〉ことに悩み、苦しみ、果敢に挑戦し、そして人々を愛し、人々に大いなる希望と勇気の灯をともしながら激動の時代を生きた伝説の人〈ヘレン・ケラー女史〉は、わが国の大恩人なのです。

「ソーシャル・インクルージョン」を考えるうえで、ヘレン・ケラーや岩橋武夫の足跡をたどることは、多くの実践的な示唆を得ることだと思います。（終わり）

【お詫び】12月号の「ヘレン・ケラーさんとの出会い」①に掲載しました＜ヘレン・ケラーの年譜＞に誤りがありましたのでお詫びして訂正いたします。
〔正：1880年6月27日、アメリカ合衆国…、正：1882年、2歳（生後…）、正：1887年、彼女の…〕

※この稿は平成19年9月28日に大阪市社会福祉研修・情報センターで開催された「平成19年度　第2回社会福祉講演会」の講演内容の聴き取りから抜粋、再構成したものです。また本稿は2回完結の2回目となります。